

日本を取り巻く三つの国境問題、  
尖閣・竹島・北方領土。

このチャレンジを日本はどのように乗り越えるべきか？  
ヨーロッパ、コーカサス、中央アジア、南アジアなど  
世界の事例から考える。

本書は、2005年5月に開催されたスラブ研究センター公開講座「ユーラシアの国境問題を考える」の講義録である。2005年は年頭から国境問題をめぐって大荒れとなった。竹島問題（日本と韓国）、尖閣列島問題（日本と中国）がクローズアップされ、「反日デモ」もエスカレートする。竹島の島根県編入から100周年（日露戦争中の1905年に編入）、尖閣の沖縄編入から110周年（日清戦争中の1895年に編入）。日口の国境を初めて定めた通好条約からは150周年（1855年締結）。日本が抱える国境問題全てにとって節目となる年であった。ところで、世間ではあまり知られていないが、実はユーラシア全体のスケールにおいては、国境問題は解決への気運が高まっている（ロシアと中国、中国と中央アジア、中国とベトナムなど）。対照的に、日本が関わる国境問題は全く動かない。これはユーラシアの「例外」と考えられるのか？ それとも一時的な現象に過ぎないのか。本書は、いわば国境をめぐる日本とユーラシアの「対話」の書である（編者より）。

## 本書の構成

- 第1章 日本の外で「固有の領土」論は説得力をもつのか  
：欧州戦後史のなかで考える ————— 林 忠行
- 第2章 国境と民族：コーカサスの歴史から考える — 前田弘毅
- 第3章 旧ソ連中央アジアの国境  
：20世紀の歴史と現在 ————— 帯谷知可
- 第4章 カシミールと印パ・中印国境問題 ————— 吉田 修
- 第5章 竹島問題と日本の課題 ————— 下條正男
- 第6章 中国と日本・ASEAN間の国境問題 ————— 石井 明
- 第7章 中口国境問題はいかに解決されたのか？  
：「北方領土」への教訓 ————— 岩下明裕

### [執筆者紹介]

林忠行（はやし・ただゆき）北海道大学スラブ研究センター教授 / 前田弘毅（まえだ・ひろたけ）北海道大学スラブ研究センター講師 / 帯谷知可（おびや・ちか）京都大学地域研究統合情報センター助教授 / 吉田修（よしだ・おさむ）広島大学大学院社会科学部教授 / 下條正男（しもじょう・まさお）拓殖大学国際開発学部教授 / 石井明（いしい・あきら）東京大学大学院総合文化研究科教授 / 岩下明裕（いわした・あきひろ）北海道大学スラブ研究センター教授

北海道大学出版会

tel.011-747-2308  
fax.011-736-8605

定価1680円（税込）／A5判・200頁／発売 2006年6月  
ISBN:4-8329-6661-8 C1031

お問い合わせ先：北海道大学出版会 担当：前田次郎 hupress\_3@hup.gr.jp  
または最寄りの書店にお問い合わせください。

# 国境・誰がこの線を引いたのか

国際関係、国際法、安全保障、歴史、政治、経済、社会、民族、文化など  
様々な角度から踏み込む日本初の本格的な国境問題研究

## 日本とユーラシア

### 岩下明裕 編著